

國末泰平著『芥川龍之介の文学』

笠井秋生

この書は一九七三年から一九九七年までの二十四年間に、学会誌や記念論集などへ発表した十二篇の論考を集成したもので、四つの章から成り立っています。章題のみを列記すれば、〈序章 芥川龍之介の古典——芭蕉と『今昔物語集』〉、〈一章 見える世界〉、〈二章 見えない世界〉、〈三章 時代と「鏡」——志賀直哉と斎藤茂吉〉となりますが、本書の中心は〈一章 見える世界〉と〈二章 見えない世界〉にあり、そのことは、表紙カバーの次のごとき一文からも理解されます。

〈芥川文学の構図は「見える」世界から「見えない」世界の表現へらせんの階段をのぼっていくと規定できるのではないのか。初期の「鼻」「芋粥」「地獄変」などで「見える」世界を、晩年「馬の脚」「蜃気楼」「歯車」などで「神秘」あるいは「見えない」世界を描く。「見えない」世界を描くことで人間と社会の真実をつたえる芥川文学の実態を明らかにする。〉

それゆえ、著者の國末氏に対しては失礼なことになります。紙幅の関係もありますので、〈一章〉と〈二章〉を対象にして私の感想をつづり、責めを果したいと思います。

〈一章 見える世界〉は四篇の論考から成り、〈一 下意識に関する試論〉で、著者は、「馬の脚」「海のほとり」「死後」「点鬼簿」「彼第二」「玄鶴山房」「蜃気楼」「河童」「手紙」「歯車」「夢」などの晩年の諸作に言及しつつ、〈下意識、神秘の世界〉への関心は、〈二つの手紙〉（『黒潮』大6・9）から始まり、〈以後ずっと芥川の中でくすぶりながらもそう表面には出ず、一時はむしろ切り捨てようとする意図さえうかがえる〉が、〈しかし晩年には単なる関心としてではなくより主体的な課題〉となったと力説しています。

この〈下意識に関する試論〉は、十二篇の中ではもっとも早い時期の論考で、國末氏の芥川研究の出発点となったものであろうと想像されますが、本書のモチーフはこの一篇にほぼ語り尽されていると言つていいでしょう。芥川の初期から存在した「下意識、神秘の世界」への関心は、晩年に至り〈単なる関心としてではなくより主体的な課題〉になったというのは、表紙カバーの〈見える世界から「見えない」世界の表現へらせんの階段をのぼっていく〉ということにほかなりませんが、こうした視点から芥川

文学の軌跡を辿ろうと試みたのは著者が最初ではないでしょう。その意味で、この書は私にとってたいへん新鮮であり、刺激的でもありました。

しかし、気になる指摘がない訳ではありません。著者はこの論考の中で、芥川がその芸術活動の初期に意識的芸術活動を主張し、徐々にそれを否定する傾向を示していたのは周知の通りである」と述べています。こうした指摘は巻中でしばしば繰り返され、「二章」にも、「神秘的なもの、意識をこえたもの、つまり下意識にかかわるものが身近に、切実なものとしてとらえられるのは「大導師信輔の半生」以後であった。それは意識的芸術活動の否定とも軌を一にする」とあります。

芥川は確かに著者が引用することく、早くに「芸術活動はどんな天才でも意識的なものだ」(無意識的芸術活動とは、燕の子安貝の異名に過ぎぬ)と語り、そしてその後、「芸術家は何時も意識的に彼の作品を作るのかも知れない。しかし作品そのものを見れば、作品の美醜の一半は芸術家の意識を超越した神秘の世界に存してゐる」(あらゆる芸術的活動を意識の関の中に置いたのは十年前の僕である)と述べて、最初の主張を修正しています。しかし、こうした芥川の変化は、「意識的芸術活動の否定」ではなく、「無意識的芸術活動」の否定から肯定への過程だと解すべきではないでしょうか。

「二」「芋粥」「戯作三昧」「河童」など——芸術と現実との相克」は、「手巾」「或日の大石内蔵助」「將軍」「芋粥」「戯作三昧」

「河童」などの作品から芥川の(批判精神)を読み取り、その知識人的性格を明らかにした論です。一見、本書のモチーフとは無関係のようですが、芥川が、神秘あるいは下意識の世界を主体的な課題として考えはじめるのは、「大導師信輔の半生」以後であった」といった言説があることから理解されることく、「見える」「世界から「見えない」世界へ」の階段をのぼっていく」という著者の問題意識はこの論考をも貫いております。

「三」「地獄変」——芥川龍之介の「出発」の初めの部分には、「(地獄変)」には「研究者をうろうろさせる不透明な部分」があるが、「この不透明部分を少しでも透明にしようとするのが小論の目的である」と書かれてあります。ついで、良秀の夢やその分身とも言うべき猿の役割についての考察がなされ、同時に、「地獄変」執筆の時点での芥川は「見ることの出来る世界、いいかえれば意識できる世界の表現にとどまつていたので、(良秀の意識の深層、下意識を描ききれ)ず、その結果(人間良秀を統一体として描くことはできなかった)」という独自の「地獄変」論が開示されています。いささか著者の問題意識に引きつけ過ぎたきらいがない訳ではありませんが、良秀の夢の意味や猿の役割をどのように解釈するかがこの作品の理解の決め手になることを再認識させる示唆に富む「地獄変」論だと言つていいでしょう。

この書のモチーフがもつとも鮮明に提出されているのが、「(四」「沼地」から「夢」へ——芥川龍之介の推移)です。最初に、「沼地」(新潮)大8・15)は「意識に全幅の信頼をおきな

ら創作活動を続けた芥川の最後の作品であることを明らかにし、ついで、「沼地」以後〈神秘的な世界、下意識を扱った作品は急速に増えてくる〉と説き、そして、芥川の「沼地」から「夢」への歩みは、〈意識の世界の「表現」から見えない世界、下意識の「表現」への推移〉の過程であり、それは「人間全体」を総合的に「表現」すべく下意識に迫る過程でもあったと結んでいきます。この論考で特に注意されるのは、これまでほとんど言及されることのなかった未定稿「夢」を取り上げ、「夢」で芥川は下意識に真正面から対決したと説いてこの作品を高く評価していることです。著者の芥川観の当然の帰結ですが、昭和二年五月ころの脱稿と推定されるこの「夢」という作品にはさらなる検討が加えられるべきでしょう。

〈二章 見えない世界〉も四篇の論考から成っています。〈一「馬の脚」——冥界からの生還〉は「馬の脚」(「新潮」大14・1)の最初の本格的な作品論です。〈下意識、神秘の世界〉を描いたこの小説の主な作中人物は、主人公の会社員(忍野半三郎)、その妻(常子)、同仁病院長の(山井博士)などですが、著者はまず、これら作中人物名に籠められている寓意を、例えば(妻常子は「いつも微笑を浮かべ」美人でもなく醜婦でもない。「平々凡々」たるがゆえの「常子」である。)というふうには、解き明かしつつ、作品を読みすすめていきます。そして、(社会主義、家族主義への寓意、批判)、(ジャーナリズム批判)、(社会への「幻滅」、(孤独)、(権威への寓意、批判)などをこの小説から読み

取り、「馬の脚」は社会的真実、作家的真実の両者をかね備えた作品だと高く評価しています。言及の乏しい、関心度の低いこの作品にさまざまな角度から照明を当て、その魅力を引き出したところにこの書の意義のひとつがあり、巻中もつとめ優れた論だと言うべきでしょう。この論考の数年後に、須田千里氏が「馬の脚」の典拠をつきとめ、「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』——その典拠と主題をめぐって——」(「光華日本文学」一九九六・八)を発表しています。これもまた優れた論ですが、「馬の脚」研究の進展に著者の仕事が深く関わっていることは言うまでもありません。

〈二「蜃気楼」——見える世界と見えない世界〉も、興味深い論考です。「蜃気楼」はよく知られていますように、(そのうちに僕等は門の前へ……半開きになった門の前へ来てゐた。)という一文で閉じられています。この「半開きになった門」をどう解釈すべきか、長年私は答が得られぬまま現在に至っていますが、著者の解釈を読み啓発されました。著者は、「半開きになった門」とはなにか。「意識の関」の門ではないのか。「見えない」世界、意識の向こう側へ通ずる門がまだ「半開き」の状態なのであると説き、更に、「自我と無意識」の、「見える」世界と「見えない」世界の、そして意識できる世界と「意識の関の外」の間が「半開き」なのであるとつけ加えています。そのほか、この「蜃気楼」論には示唆に富む指摘が少なくありませんが、「蜃気楼」のテーマは「意識の関の外」を含めた、「見えない」世界を含めた

「人間全体」の表現ないしは志向である。志向とするのは芥川の「茫々と広がつた」魂のアフリカの認識にもとづく」といった主題把握もそのひとつです。

最後に、もうひとつだけ気になったことを記します。(三)「歯車」の中で著者は、「地獄変」が「僕」を「苛立たせずには置かな」いのは、そこに描かれたのが分裂する良秀であつたからであらう。唐突に言えば芥川は「歯車」でその統一をなしたことになる」と述べています。(一章)の「地獄変」論にも、(人間の良秀がほんとうの良秀か、猿の良秀がほんとうの良秀か。このことが晩年「歯車」の時点での敗北感、「地獄変」への「苛立ち」へ重なるものであらう」とあります。著者の解釈に従えば、「歯車」執筆の時点で、芥川は「地獄変」へ「苛立ち」を覚えていたということになりませんが、そうした解釈は成り立つのでしょうか。

「歯車」の(五 赤光)には、(それから今度は手当り次第に一つの手紙の封を切り、黄いろい書簡箋に目を通した。この手紙を書いたのは僕の知らない青年だつた。しかし二三行も読まないうちに「あなたの『地獄変』は……」と云ふ言葉は僕を苛立たせずには置かなかつた)と書かれています。著者の解釈はこの一節から導き出されている訳ですが、「歯車」の(三 夜)から(五 赤光)に至るコンテキストを無視したものと云わざるを得ません。勿論、この「歯車」論にも、「歯車」に「ポオドレエル」の名が見えないのは、「ポオドレエル」の世界に「歯車」が近いがゆえに、あまりに「ポオドレエル」的であるがゆえにその名が

ないのではないか」といった傾聴すべき指摘も多くあります。しかし、作品の細部の理解などにやゝ慎重さを欠くところも少なからずあり、それが、著者独自の芥川像が鮮明に描かれる本書の弱点であると言えるでしょう。

(和泉書院 一九九七年六月 二三七頁 二八〇〇円)

(かさい・あきふ 梅花短期大学教授)